

国語科授業案

教科で育みたい人間像 「豊かな言語感覚をもつ人」

授業者 三島 将弘

- 1 日時 令和6年11月1日(金) 第2時 11:30~12:20
 2 学級 2年A組 (2年A教室)
 3 題材名 伝えたいことは何だ!?

4 本題材で願う学び

論説文をもとに、難解な文章や言葉を仲間と吟味・考察し、それに対する適切な題名を考える活動を通して、本文に記されている具体例と、書き手の主張との関係を考えながら内容を正確に把握することができる。そのうえで、本文から得た価値観と既存の価値観を照らし合わせながら、考えを更新する中で、価値観を豊かにすることができる。

(学習指導要領との関連：[思考力、判断力、表現力] C読むこと (1)ア、オ)

5 これまでの学び

子どもたちは、多様な題材に出会い、言葉を吟味しつつ内容を解釈したり、自らの考えと向き合ったりする中で、以下のような学びを積み重ねてきた。

(1) 言葉に注目しその価値観を深める学び

複数の詩を読み比べる中で、用いられた言葉の意味を吟味し、言葉のもつ意味の広がりを感じてほしいと願い、『虹の足』と『見えないだけ』という二つの詩を題材にした学習を設定した。

子どもたちは、二つの詩を比較し読み解く中で「幸福」という共通点を見だし、作中に使われた言葉やこれまでの人生の経験をもとに「幸福」について語り合った。

語り合いを通して子どもたちは「幸福」とはどのようなものかを改めて考えることにより、「幸福は目に見えないものもある」「幸福は自分の主観で、客観的には判断できない」など、「幸福」という言葉の視野を広げ、その言葉がもつ価値について改めて理解を深めていた。

このように言葉に注目し、作品の中で表現された価値観と自らの価値観を照らし合わせたうえで、意味・解釈を語る活動などを通して、言葉がもつ辞書的な意味だけでなく、実生活の中で示す意味まで子どもは学びを広げていた。

この題材で見せた姿は言葉を多面的・多角的に見る視野を広げ、言葉の新たな魅力を見つける姿に近づくものであったといえよう。このような姿は言語感覚を研ぎ澄ますうえで必要だと考えられる。

(2) 多様な価値観にふれ、自らの考えを深める学び

古典の作品にふれ、当時と現代のものの見方・考え方を比較する中で、古典に親しむことを願い『虫愛ずる姫君』を題材にした学習を設定した。

子どもたちは資料から作品の時代背景を読みと

ると、当時の常識を踏まえたうえで姫君と両親の価値観の違いなど、古典にあらわれた当時のものの見方・考え方を感じとっていた。世間体を気にする親の気持ちや、女性の結婚観について自らの感覚と比較する中で、現代でも通じる思考や今とは異なる文化に気づく姿が見られた。また、内容の読解を進める中で、姫君の言葉に注目した子どもが、「姫君の愛する虫に『蝶』は含まれるのか」という疑問を学級全体で共有し、追求し議論する姿にまで発展した。

このように読みとった内容を自分の経験や価値観と照らし合わせ、自らの考えを更新する姿は、多様な価値観にふれ、自身の価値観を育むことにつながるだろう。また、題材の内容に対して新たな問いを見だし、その問いを解き明かそうとする姿は、作品の世界に親しんでいる姿の一つであり、自分ごととして学びを得ていたといえる。

どの題材にも共通する子どもの姿は、追求するテーマを集団で話し合い、主体的に学び深める姿である。追求するテーマは題材と出会った子ども同士が話し合うことで決まっていく。授業者は話し合いの内容を傾聴し、まとめたり問い直したりして子どもの疑問を焦点化することに努め、基本的に子どもの意思を尊重してきた。

子どもたちは設定したテーマを追求する過程で、用いられた言葉に注目したり、自らの理解と向き合ったりしてきた。また、自らの思考を仲間と語り合う中で新たな視点や発見を得て、再び思考していた。その活動に繰り返し親しむ中で言葉を吟味し、国語の学びを深めてきた。

(3) 作品の構成に注目して読みを深める学び

説明的文章を用いて、言葉のつながりを意識した構造的な読みを深めることを願い『プロセスの建築』を題材にした学習を設定した。

子どもは題材に登場する具体例の内容を追求したあとに、筆者の主張を明らかにしようとする中で、生涯をかけ建造物としての目的をもたない建造物を造りあげた人物に対して興味を示したり、作品の意図に疑問をもったりする姿が見られた。テーマを設定し追求する中で「筆者の伝えたいことがわかる」「この人物の熱意に共感できる」「喪失感ではなく虚無感という言葉なのが空っぽ感を生み出している」など作品にのめり込んで読んでいく姿が見られ、次第に「難しいけれど、おもしろい」といった感想も見られるようになった。

このような子どもの変容は、題材に対して粘り強く追求する姿勢があるから見られるものであろう。

ただ、学習の終末に向かう過程で筆者の主張の読みとりが各々で大きくずれる姿も見られた。それは筆者の主張の鍵となる言葉に注目し、具体例との関係から主張を読み解く子どももいれば、具体例の内容に大きく影響を受け、具体例こそが主張であると読みとる子ども、自身の経験に重きを置き自分の価値観にのみもつづいた自由な解釈をする子どもなど、作品との向き合い方に違いがあるからだろう。

用いられた言葉を吟味し着想を広げる読みも重要だが、作品の世界に適切に親しみ切れていないことは望ましくないだろう。作品の世界に親しみ豊かな言語感覚を育むためには、作品を構成する言葉の関係に注目し、その構築された世界を正確に読み取ろうとする姿勢も重要であると授業者は考えた。

そこで再度説明的文章を題材にとりあげることとした。

6 題材観

(1) 本題材の価値

① 国語で思考・表現を繰り返すことの価値

思考は頭の中で行われることであり、思考は言語を用いて表現されるまで確かな形はもたず、言葉として外に表現されることで初めて形作られる。つまり、思考を適切に表現するためには、適切な言葉を選ぶ必要がある。

この適切な言葉を選ぶ感覚に正解はない。言葉によって表出された思考を自ら客観的にとらえる中で納得感を得たり、不満感を得たりするだろう。また、他者に対して表現した内容が正確に伝わったり伝わらなかったりすることもあるはずだ。思考を表現するのに適切であったかどうかは、自らの納得感や他者からの返答によって判断することになる。このように、思考すること、思考したことを表現すること、その表現をもとにまた思考することを繰り返す中で言葉が吟味・洗練され、その結果として言語感覚が養われるのではないだろうか。

何を表現するにも「今」の自分の考えを表出することに価値がある。考えは今後の人生で変わっても

よい。ただ、自らの考えを表現することで、自らの考えと客観的に向き合うことが可能になる。その結果、思考はより鮮明なものになり、それらを表現する言葉もより磨かれたものになるのだと考える。

② 論説文について

ア 論説文の魅力

論説文の魅力はその構成の特徴や新しい価値観にふれられることにある。

論説文は立論の過程で読者に納得感をもたらすために、作品の細部までこだわり、さまざまな工夫が用いられている。そのように書き方に工夫を凝らされた文章を読み、親しむことは、よりよい構成の方法や工夫の効果を理解することになるだろう。それは読み手の論理的な思考を作ったり、表現したりする助けとなり、同時に他者の考えの論理を理解することにつながるはずだ。

また論説文を読みを進めることは、書き手の思考の過程を疑似体験することであり、新たな考え方にふれることにもつながる。この新しい考え方と出会えることも魅力の一つである。論説文には作者の価値観が大きくあらわれる。その価値観は当たり前のもや、考えが至らないようなものまで幅広くある。他人の価値観にふれ、その思考の過程をたどることは、読み手の思考を豊かにし、より幅広い見方や考え方を育むことになるだろう。

この考え方にふれる際に、論説文は特に言葉の吟味を欠かすことができない。もし、言葉を吟味せず作品を読めば、作者の言葉でまとめられた表面的な主張しか読みとれず、筆者の提示する本来の価値観ではなく、誤った読みにもつづいた自らが作り出した価値観を筆者の主張としてとらえてしまうことが考えられる。それは文章を正確に読みとることはならず、他者の思いや考えを感じとることからも離れてしまう。

このように、内容を把握するために、言葉の吟味に正確性が求められることも論説文の魅力であると考えている。

イ 『現実とは何か』の魅力

本題材では養老孟司が書いた『現実とは何か』を読む。この文章は脳が五感情報を処理して作りあげる身の回りの世界像の中で、「現実」がどのように作り出されているのかを「重みづけ」という視点から論じたものである。

現実や社会などなじみのある言葉が、脳の認識の観点から語られており、読み手に普段意識されない「現実とは何か」を考えさせる構成となっている。

この題材は読み応えがあり、出会った人はおそらく難解な内容に戸惑い、伝えたい内容が何なのかを悩むだろう。ただ一見難解な様相を示すこの作品は、

立論の流れが明確であり、内容を理解しようとする過程で「脳」「社会」「現実」「世界像」「重みづけ」などが作品を構成する重要な言葉であることに気づくと予想される。その気づきのもと、段落の役割や言葉の関係に着目し丁寧に読み進める中で、筆者の最も言いたい「脳の働きと認識する世界の関係」を読み解くことは難しくない。

③ 題名をつける価値

作品の題名に正解はない。自分の思うままに表現できることが魅力であり、書き手の個性が最も出る部分でもある。ただ、正解はなくとも、よりよい題名は存在するように思う。題名は、読者が作品にふれる最初の部分であり、読み終えたあとに戻る最後の部分でもある。掴みのある題名であれば、読み手の興味を引くことになるが、論説の主張の重みを軽減してしまい、作品の質を問われるものになる。また、結論をそのまま述べてしまうような題名であれば読者の興味を引かず、主張やその根拠にふれる機会をなくしてしまうことが考えられるだろう。

題名は読み手の興味を引きつつも、内容から外れることのない絶妙なバランスのもとにつけられている。作品の題名を考案することは、その作品の価値づけを行うことであり、よりよい題名は作品の内容を適切に読み進めたうえで、言葉を吟味し、端的にまとめることが求められる。

題名について議論することにも価値がある。題名設定における重点は個々の価値観によって異なる。そのため同じ作品でも、題名をつける人が変われば別の題名がつけられるはずだ。同じ作品で、自分と違う題名をつけたのなら、その根拠を問いたくなるだろう。その基準となった価値観を語り合うことは、新たな題名設定の基準や読みの視点を得ることになり、言葉を吟味する姿勢を育むことにつながる

考えている。

(4) 本題材で願う子どもの姿

題名の価値や題名をつけるために必要な過程を共有した子どもには、「題名をつける」という目的を達成するために作品を吟味しようとする姿勢をもってほしい。その意欲が一見難解な題材と出会い、戸惑いを得たあとの読みを深める原動力となるはずである。

題材と出会った子どもが、目標に向かって作品を読み、難解な箇所を本文の言葉を根拠に仲間と語り合うことを通して、言葉を吟味し、言葉と言葉のつながりに着目して作品を読む重要性に気づき、作品を読み進める姿に期待したい。

作品を読み進める中で、子どもは作品を構成する重要な語句に気づくだろう。その言葉を軸に言葉同士のつながりに着目し作品と向き合うことで、難解な様相を見せた文章が徐々に理解できる楽しさを味わうだろう。

作品を読み終えたあと、題名を考察する際に今度は適切な言葉選びに頭を悩ませるはずである。その悩みが文章の要旨を考える活動となり、読みとった内容を整理することにつながるだろう。その思考の過程の中で、子どもが自然と言葉を吟味し、言語感覚を養う姿に期待したい。

また、題名を仲間と吟味する場面では、本文や経験を根拠とした議論を行い、その議論の中で新たな価値観や視点に気づくだろう。他者の題名の意図を考察することは、相手の言葉の意図を考える活動でもある。このような思考を繰り返す中で、子どもは自らの価値観を更新するのではないだろうか。

この題材を通して、子どもが言葉を吟味し「豊かな言語感覚をもつ人」に近づくことを願いたい。

7 題材構想 (全 16 時間)

- (1) 題名づけの価値を見いだす (3 時間)
- (2) 本文の感想から追求テーマを決める (2 時間)
- (3) 本文の内容を吟味する (7 時間)
- (4) 題名を考察し吟味する (3 時間：本時はその 3)
- (5) 学びを振り返る (1 時間)

本題材は、難解な文章や言葉を仲間と吟味・考察し、それに対する適切な題名を考えることを通して、文章中に記されている具体例と、書き手の主張との関係を考えながら内容を把握する活動を軸とする。

ただ、これまでの子どもの学びの姿から、作品を読むことを軸に置いた題材では作品を正確に読むことではなく、作品から世界を広げる読みを行う傾向があると考えている。

そこで、本題材では子どもへの最終目標のなげかけとして「文章に題名をつける」ことを選択した。

題名をつけることの価値を十分に理解したうえで、この活動を設定することは、内容をより正確に理解しようとする姿勢につながるはずである。

授業を進める中で子どもは、自分が理想とする題名をつけるために、作品を読み込むだろう。他者がつけた題名と自らの題名にずれが生じれば、相手の

意図から作品に戻り、また作品を自然と読み返したくなるはずである。

「題名をつける」ことは子どもに示す目的であり、授業者の目的は「文章を正確に読む姿勢」を生み出すことである。ただ作品を読むのではなく、ある目的に向かう中で必然的に作品を読むという姿勢が学びの自然な流れだと授業者は考えている。

子どもが「題名づけ」という目標に向かい、作品を読み解こうとする中で、作品と向き合い、その作品の世界に親しむ姿勢が自然と形作られる題材構想を意識したい。

(1) 題名づけの価値を見いだす (3時間)

本題材では題名に価値を見いだすために、料理のレシピ、短い文章、社説の順に「伝えたいこと」と「題名」を考える活動から始める。

子どもはさまざまな価値観から題名づけを行うだろう。その題名を披露し合う中で、多様な題名の可能性に気づくはずである。多様な題名があるからこそ、子どもはいい題名はどれかという疑問をもつだろう。社説までの活動を終えたあと、授業者は「題名に求められるものは何か」をなげかける。その語り合いの時間を設定することで子どもは以下のような思いを共有するだろう。

- ・ 題名のつけ方にもいろいろある。正解はない。
- ・ わかりやすい題名がよい。
- ・ 題名がおもしろくないと読みたくない
- ・ 内容とかけ離れているのはよくないが、わかりやすすぎてもよくない。読む気がしない。
- ・ 最近の小説は長いタイトルもあるが、社説などには望ましくないだろう。
- ・ 題名は要約のようなものだから、内容をまとめる言葉がいいのではないか。

題名にも、さまざまな意図や効果があることに気づいた子どもは、その価値について新たな視点を得るだろう。このような視点をもった子どもに授業者は「もう少し長い文章ならどうだろうか」を問いかけ、新しい学びの機会を提供し、次の学びの段階へとつなげていきたい。

(2) 本文の感想から追求テーマを決める (2時間)

第四時に子どもが題材と出会う場面を設定する。授業者は資料を配布し、範読を行う。読み終えたあとは感想を記入する時間を確保し、第五時からその感想を共有する中で追求するテーマを決める活動に入る。

子どもは文章を読み終えたのちに、以下のような感想をもつだろう。

- ・ 内容が難しい。
- ・ 結局何がいいたいのかわからない
- ・ 難しい用語がたくさん出てくる。今まで読んだ文章の中でも読み応えがある。
- ・ 世界像や社会、現実などなんとなくわかるようわからない。
- ・ 題名の見当がつかない。

子どもは、文章の難易度に始めは戸惑いを見せるだろうが、一読したあとも内容をとらえたいという思いから文章と向き合う時間を求める姿が予想される。その際にも、どのような目的をもって作品を読むのかを問い返し、追求のテーマを設定することの大切さを子どもと共有していきたい。

最初の追求のテーマは「筆者の伝えたいことは何か」のような、内容の全体像に関するものが挙げられるだろう。授業者は感想の共有の際に発言を傾聴し、「それってどういうこと」など、問い返す中で子どもがもつ疑問を鮮明なものにしていくことを意識したい。

(3) 本文の内容を吟味する (7時間)

第六、七時は子どもが追求テーマに向かって個人で読みを深める時間を設定する。子どもたちは作品と向き合う中で、用いられる言葉を吟味し内容を読み深めようとするだろう。長い文章を読むことに難しさを感じる子どもには、段落ごとまとまりを整理して読むことを促すなど、作品に向き合う姿勢を補助していきたい。

第八、九時で一度学びを語り合う時間を設定したい。これまでで理解したことを共有する中で、新しい疑問や問いを見いだすことを願う。子どもは仲間と語り合う中で、自らの視野が広がったり、口に出すことで思考がまとまったりするだろう。授業者は意見を傾聴しつつ多様な考えが視覚化され、共有できるような板書や声かけを意識したい。

子どものあらわれによっては、作品の本質に迫る追求テーマを再設定することもある。それは「現実とは何だろう」「脳の作り出す世界像とは何か」など言葉と言葉のつながりを吟味して読みとるテーマとなるだろう。また、追求したいテーマが複数にわたるようであれば、小集団で追求し、のちに全体で共有する形をとることも視野に入れたい。

語り合いの中では以下のような子どもの反応が予想される。

- ・ 脳とか五感とかの話をしたのではないか。
- ・ 「脳」「社会」「現実」「世界像」「重みづけ」などが重要だと思う。ここを中心に読めばいい。
- ・ 言いたいことがなんとなくわかるのだけど、主張

が今一はっきりしない。ここを掘り下げたい。

- ・ネコやダニは重要ではない。あれは具体例の一つだと思う。
- ・真善美という言葉が出てくるが、これは附属中の校訓と同じ意味なのだろうか。
- ・重みづけという言葉はどのような意図で用いられているのか、追求していきたい。
- ・脳の仕組みということまではわかった。そこと普通の現実という言葉のつながりがわからないからみんなで学びたい。

語り合いを経て生じた新たな問いや追求テーマをもとに第十、十一時で読みを深めていく。この時間の中で子どもは作品の細部に注目した読みを展開していこう。また、内容がとらえられてきた子どもは自らの体験と照らし合わせ「〇〇という経験が近いのではないか」という自身と結びつけて学びを深める姿も見られるはずである。

第十二時で作品を味わったうえでの語り合いを行う。ここでは、筆者の主張をとらえた学びが共有されることが予想される。

- ・脳が私たちの世界をどうとらえているのか、説明しているのだから。脳の認識が私たちの思考に影響しているというのは興味深い。
- ・私たちは知らず知らずのうちに、個人の「重みづけ」がなされた世界を見ているのかもしれない。これは私の〇〇の時の経験だけど……。
- ・「普通の人」という表現が気になるけれど、自分は普通の人の世界観で暮らしていると思う。だって何かにこだわりをもっていないから。
- ・恋愛している時は、確かにその人が優先されてしまうのはわかる。とても納得できる。
- ・現実や世界像など、今までの見方が変わるかもしれない。現実って一体何だろうと思えた。
- ・色々な例がわかりやすい。だからこそ、何だか怖い。

学びを共有する中で、構造に注目して読み進めていったり、具体例に言及したりする子どもも出てくるだろう。そのような反応が見られた時には、授業者が説明するのではなく、子どもに問い返す中で、どのような視点で論説を読み解いていったのか語る姿に期待する。

(4) 題名を考察し吟味する (3時間)

第十三時に題名の考察を共有する。子どもたちは学級で共有した内容をもとに、適切だと思われる題名を懸命に考えるだろう。読みとった内容や重要だと判断した語句、印象に残った部分、それらを上手くまとめながら自らの内にある言葉を吟味する過

程は、言語感覚を磨く姿となると考える。

第十四、十五時は題名を学級に伝え合い、題名の吟味を行いたい。共有の際は ICT 機器を活用し、無記名で全員の題名が一斉に共有されるように配慮する。そのあと班活動を設定し、それぞれの題名を吟味する活動を設定する。班活動の中では自らの読みとった内容や、題名をつけた意図を存分に語り合ってもらいたい。多様な価値観にもとづいた題名について語り合うことは、互いの視点を育むことにつながるだろう。班員の語り合いが終わったあとには、共有されている他の題名の吟味が始まることが予想される。そのような自然発生的な吟味は、無意識のうちに言葉を吟味する思考を促していくだろう。

班活動を終えたあとは、題名を吟味したうえでの感想や発見を共有したい。また、よいと思う題名についても理由を存分に語ってもらいたい。他者の指摘や感想は多くの子どもに達成感を与えるだろう。

- ・私は題名を「脳が作る世界像」としました。それはこの話の中で現実が個人の脳で作られると感じたからです。
- ・僕は「現実が重みづけで決まる」という題名が適切だと思う。重みづけは最後に出てきているし、現実への視点もはずせないだろう。
- ・「現実とは何か」という題名がよいと思う。今まで何も考えていなかった世界は、個人の脳によって見え方が違うことがわかったし、現実って言葉を考えさせられる内容だった。
- ・「恋愛は脳をバグらせる」は正直掴みを狙い過ぎている気がする。作品の雰囲気とは合わないよ
- ・この「〇〇」という題名はいいね。自分にはない視点だと思うし、おもしろい。
- ・「普通は普通じゃない」とあるけど、普通という言葉が作者はどう使っていたかな。

(5) 学びを振り返る (1時間)

第十六時は、どのような学びを得たのか言語化する活動を設定したい。この時間は個人の学びを振り返り、自らの考えを見つめ直したり、整理したりする時間として活用してもらいたいと考えている。子どもは作者の主張に対しての自分の考えを書く中で、具体例や主張の関係などそれに伴って得たさまざまな学びを表現するだろう。この学びを言語化する活動が、子どもが自らの学びを自覚する機会になると考えている。

題名をつけることに関する学び

- ・題名を考えることは初めてだった。色々な題名があり、つけることの難しさと楽しさを感じた。
- ・いい題名をつけるには主張だけではなく内容をしっかりと読み込むことが大事だ。

- ・題名に正解はない。だけど、内容をとらえた題名だと、どんな形でも納得できる。逆に、内容を読んでいると違和感のある題名もあったから、名前をつけるというのは大切だと感じた。

主張に対しての学び

- ・最初は読めないと思っていたけれど、言葉の意味を考えながら読み進める中で筆者の主張が段々とわかってきて楽しくなっていた。特に主張までの具体例が重要だと改めて学んだ。
- ・作者の考え方は正直よくわからない。でも脳の働きから世界像を作るといのは今まで考えたことがなかったから新鮮だった。現実には個人によってとらえ方が違うというのはおもしろいし、だからこそ人間は違う考えで生きているのだと思った。
- ・自分だけでは読むことはできなかったけど、友だちと語り合う中で納得することができた。いつか自分でも読めるようになりたい。作者の考え方は理解できる。誰かを好きになると、その人のことが一番大事になってしまう経験が私にもあった。でも何かに重みづけをすることは駄目なのかとも疑問に思った。
- ・脳が私たちの現実を作っている考え方は、正直怖い。脳に支配されているように感じた。私は自分の脳に支配されるのは嫌だからこそ、無意識に「重みづけ」をしていないか、注意していきたい。

このように、題材を通して、他者の考えに共感したり批判したりする姿が生じることが考えられる。また、題名を考察するおもしろさや難しさに言及する子どももいるだろう。このように自他の考えを見つめ直し、言語を介して表現することは、言葉を吟味し言語感覚を養うことにつながるはずだ。

本題材を通して子どもたちが「豊かな言語感覚をもつ人」に近づくことを願っている。

参考文献：文部科学省(2017) 『学習指導要領解説 国語編』
『精選国語Ⅱ』東京書籍

参考資料：エスビー食品株式会社 <https://www.sbfoods.co.jp/recipe/detail/05175.html>
国語授業の研究ノート https://kokugonote.com/setsumei_shin3doku01/
『読み方レスキュー グレードⅡ』 正進社
「大自在(社説)」『静岡新聞』2024年7月24日朝刊1頁